2023 年度ユネスコ未来共創プラットフォーム事業
近畿･北陸地域 ASPnet 校学び合い交流
報 告 書

記載：大阪関西ユネスコスクールネットワーク
大阪公立大学　伊井直比呂
ASPnet・ESD/SDGs を学ぶ自主ゼミ学生

行事の名称	**近畿・北陸地域 ASPnet 校学び合い交流　学びあい交流**
行事の目的	ユネスコスクールの児童生徒、教員、ESD/SDGs に取り組む企業、行政機関などから参加者が集まり、一泊二日＜希望ヶ丘文化公園青年の城＞で滋賀県琵琶湖周辺の高島市針江地区、近江八幡などを訪問し、琵琶湖の水を活用しながら生活する地域住民の工夫や知恵を学ぶ。この学びを通して当該地域が大切にしてきた「人と人」、「人と自然」、「人と社会」の持続可能性につながる「尊いもの」を発見し、これを基に自分たちの地域や学校における持続可能性を考える。また、社会の様々な立場や役割、組織の中で取り組まれている SDGs の知見を共有し、多分野間のステークホルダーの連携を果たす。このための実践方法として、事前学習としてユネスコスクールの意義、ESD/SDGs の基本的な考え方を学ぶと同時に、日頃行われている ESD／SDGs をテーマにした多様な実践と学びを学校単位で交換して異なる地域や世代を超えて多様な視点で学びあうことで連携が生まれることを体感する。これにより単一視点の ESD／SDGs ではなく、異なる多様な ESD／SDGs の課題や達成アプローチを共有する。
行事の実施期間	令和 5 年 7 月 24 日（月）～12 月 25 日（月）
行事の実施場所	施設名　大阪公立大学 I-site なんば、／　琵琶湖周辺地域＆希望ヶ丘文化公園青年の城 所在地　〒520-2551　滋賀県蒲生郡竜王町薬師 1178　TEL　077-586-2111
主催者	大阪・関西ユネスコスクール（ASPnet）ネットワーク 大阪公立大学（受託大学）
後援団体	大阪府教育庁、奈良県教育委員会、兵庫県教育委員会、 ※上記の他、滋賀県県庁の多大なご協力をいただいた。
参加状況	＜参加者＞　12 団体（生徒のべ 323 名）＋　各学校引率教員（のべ約 80 名） ＜見学者＞　保護者、教育委員会職員、ほか約 20 名 （ただし事情により途中参加・途中帰宅された方もいらっしゃいます）
事業の成果 Overview ↓ スタディーツアー合宿の意義確認	**1. 概　観** 今年度の事業は、ASPnet 校を主として、大学教員・学校教員・地方公共団体・一般企業・大学生・留学生・小中高校生など、異なる立場と世代を超えた SDGs に取り組む各機関が集まり、大阪公立大学での事前研修（2 回）を経て滋賀県（琵琶湖周辺）での ESD/SDGs 研修および学びあいスタディーツアー合宿を行った。これにより、人と自然が共存しながら社会が成り立つ仕組みを学んだり、持続可能な街が成立する要因を考えたりして自分たちの街で活用できることについて多角的な視点で考えた。同時に、ESD や SDGs という概念やその実践が多くの人々に受け入れられ、より大きな潮流となるよ

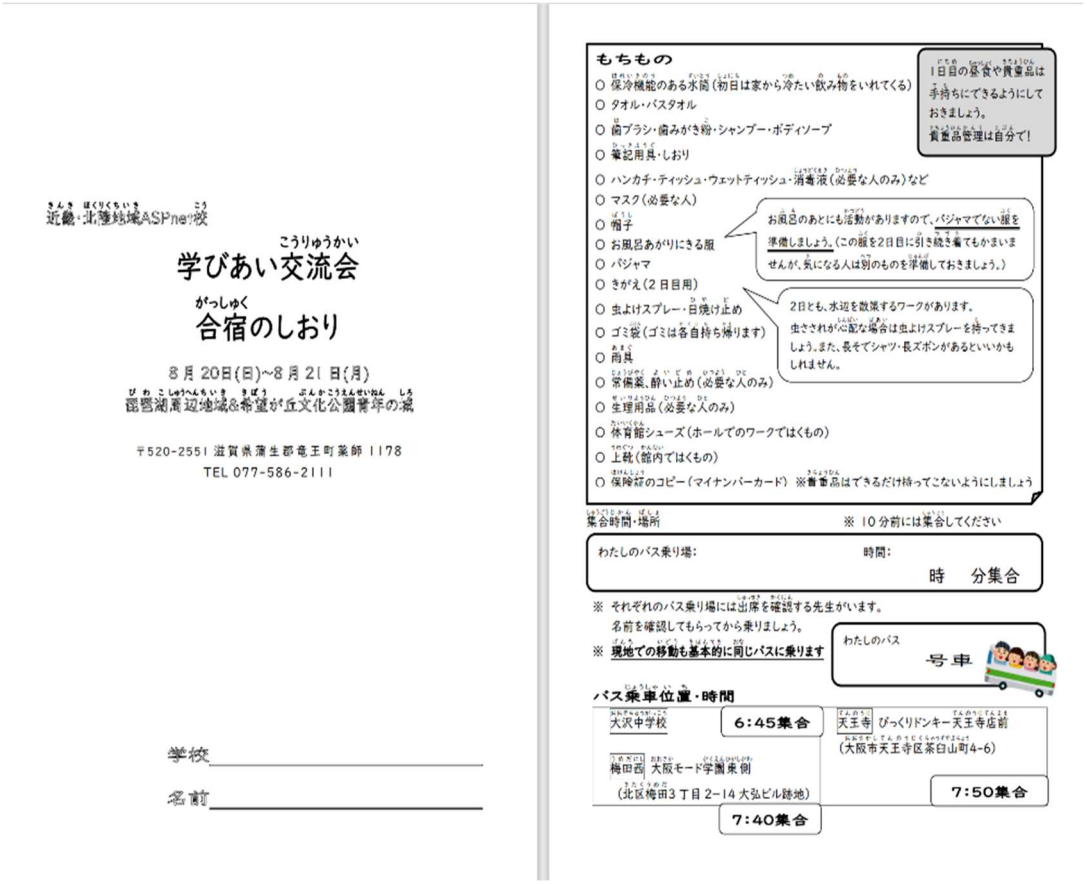
う実施された。

なお、今次はコロナ禍の収束を踏まえ、With COVIT-19 の時期に浸透した最大限の感染防止対策を施しながら、4 年ぶりの「スタディーツアー合宿」実施ノウハウの伝承や学びの継続を意識して実施された。特に、計 4 回にわたる事業（交流会（セミナー）3 回、合宿（1 泊 2 日））は、初めて参加される教員にもわかる形態と内容構成で行われた。

事前研修およびスタディツアー合宿においては、各学校が取り組み、学んでいる SDGs の内容を紹介したり、身近な生活の中で気づいた ESD の成果（課題と可能性）などを共有したりして、問題の同根性や連関性を発見しあった。そして、その上に立って短期間ながらも合宿という形態を採ることで普段接することのできない、滋賀県の二地域の住民が大切にしてこられた「尊さ」に触れることができ、より深淵な多くの学びを得ることができた。結果、尊さの発見として「学びあう姿勢」「尊重の姿勢」「寛容な態度」「思いやりと配慮による平和」といった子どもたちの成長につながる要素が学ばれた。

Details

2. 詳　細



近畿・北陸地域ASPnet校

学びあい交流会

合宿のしおり

8月20日(日)~8月21日(月)

琵琶湖湖辺地域&希望が丘文化公園青年の家

〒520-2551 滋賀県蒲生郡竜王町薬師1178
TEL 077-586-2111

学校＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

もちもの

○ 保冷機能のある水筒（初日は家から冷たい飲み物をいれてくる）
○ タオル・バスタオル
○ 歯ブラシ・歯みがき粉・シャンプー・ボディソープ
○ 筆記用具・しおり
○ ハンカチ・ティッシュ・ウェットティッシュ・消毒液（必要な人のみ）など
○ マスク（必要な人）
○ 帽子
○ お風呂あがりにきる服
○ パジャマ
○ きがえ（2日目用）
○ 虫よけスプレー・日焼け止め
○ ゴミ袋（ゴミは各自持ち帰ります）
○ 雨具
○ 常備薬、酔い止め（必要な人のみ）
○ 生理用品（必要な人のみ）
○ 体育館シューズ（ホールでのワークではくもの）
○ 上靴（館内ではくもの）
○ 保険証のコピー（マイナンバーカード）※貴重品はできるだけ持ってこないようにしましょう

1日目の昼食や貴重品は手持ちにできるようにしておきましょう。
貴重品管理は自分で!

お風呂のあとにも活動がありますので、パジャマでない服を準備しましょう。（この服を2日目に引き続き着てもかまいませんが、気になる人は別のものを準備しておきましょう。）

2日とも、水辺を散策するワークがあります。虫さされが心配な場合は虫よけスプレーを持ってきましょう。また、長そでシャツ・長ズボンがあるといいかもしれません。

集合時間・場所　　※ 10分前には集合してください

わたしのバス乗り場：　　時間：
時　分集合

※ それぞれのバス乗り場には出席を確認する先生がいます。
名前を確認してもらってから乗りましょう。
※ 現地での移動も基本的に同じバスに乗ります

わたしのバス
号車

バス乗車位置・時間

大沢中学校　6:45集合
天王寺　びっくりドンキー天王寺店前（大阪市天王寺区茶臼山町4-6）　7:50集合
梅田西　大阪モード学園東側（北区梅田3丁目2-14 大弘ビル跡地）　7:40集合

（0）事前学習

異なる組織が絡むことで新たな視点
相互補完と相乗効果（Mutual Care）

☆　事前学習：第一回交流　7/24(月)

最初にあいこじゃんけんというワークを通じて、「対等な関係性の築き方」を実際に経験した。そして、学校・学年・出身地などがバラバラな生徒がひとつのグループにランダムに集められて、それぞれが自分の学校のいいところを話し合うワークを行った。学校種や地域・場所、学年に関係なく全員が自分の学校のいいところを堂々と発表していた。

その様子はホームページを参照してください。参加者小中高大学生 92 名

☆　事前学習：第二回交流　8/7(月)

前回同様ランダムなグループに分けられ、くじ引きで与えられたお題についてグループで話し合ってポスターにまとめて発表をするというワークを行った。参与・臨場している大学生にはない豊かな発想と多角的な視点からひとつの物事に対する長所や短所をたくさん出している姿が印象的であった。

その様子はホームページを参照してください。参加者：小中高校生 103 名

（1）学びあい交流会　スタディーツアー合宿

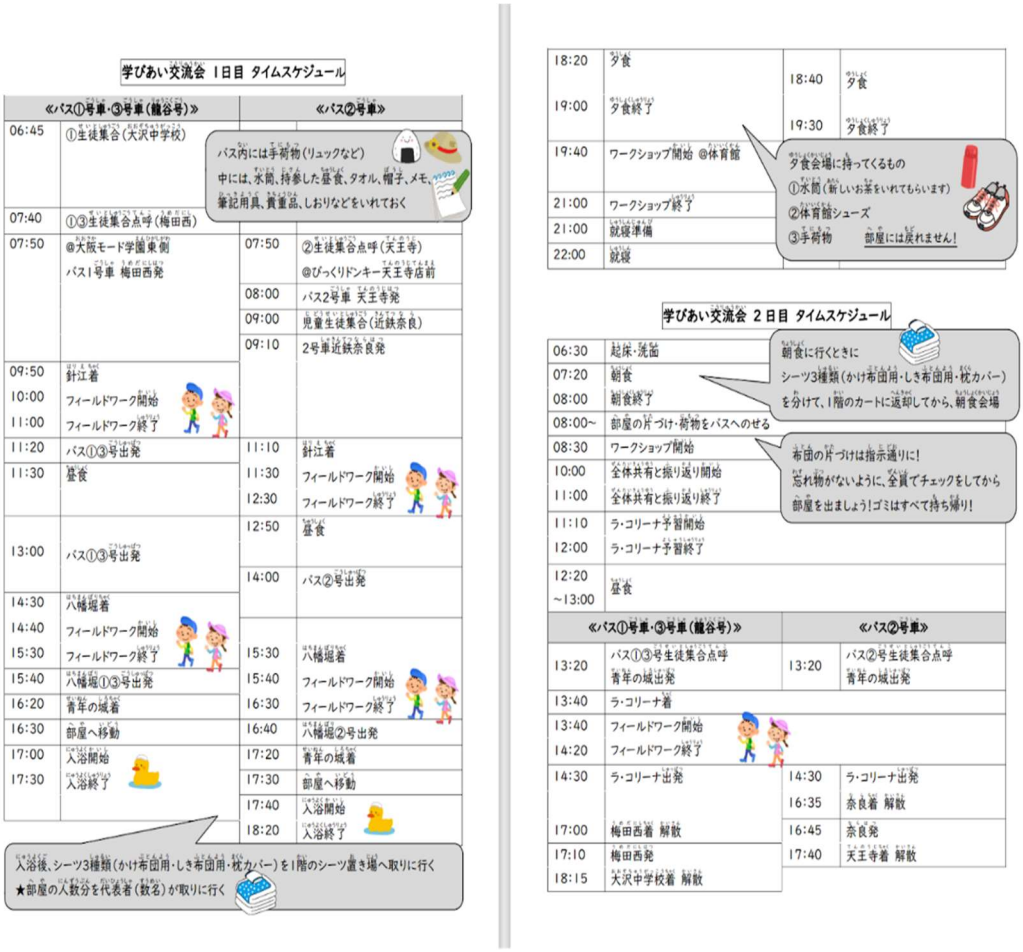
2023 年 8 月 20 日（日）から 21 日（月）の 2 日間、滋賀県周辺地域および希望ヶ丘文化公園青年の城において、小学生から高校生、大学生、そして社会人までが集まり、学びあいスタディーツアー合宿が行われた。場所は、（20 日午前）滋賀県高島市の針江生水の郷、（20 日午後）近江八幡市の八幡堀、（21 日午後）ラ・コリーナ。また、滋賀県蒲生郡竜王にある希望が丘文化公園青年の城にて学びあいの研修・宿泊を行った。

参加者は、大阪府、兵庫県、滋賀県、奈良県の小中高校生ならびに引率教員、大阪公立大学の学生および教員が参加して行われ、異なる学校種・異なる学校段階や学年による異なる視点によって構成された学びあいが行われた。

スタディーツアー合宿参加学校（事前研修除く）	人数
アサンプション国際小学校（小学生）	7 名
神戸市立大沢中学校（中学生）	10 名
神戸市立龍谷中学校高等学校（高校生）	20 名
大阪教育大学付属高等学校池田校舎（高校生）	2 名

大阪府立淀川清流高等学校（高校生）	6 名
帝塚山学院中学校高等学校（高校生）	4 名
奈良育英高等学校（高校生）	4 名
奈良県立国際中学校（中学生）	21 名
奈良県立法隆寺国際高等学校（高校生）	7 名
箕面こどもの森学園（小学生）	10 名
大阪府立大学（大学生）	9 名
滋賀県立守山中学校高等学校（高校生）	5 名
引率教員（各校から）	23 名

合計 128 名



学びあい交流会 1日目 タイムスケジュール

«バス①号車・③号車（龍谷号）»		«バス②号車»	
06:45	①生徒集合（大沢中学校）		
07:40	①③生徒集合点呼（梅田西）		
07:50	@大阪モード学園東側 バス1号車 梅田西発	07:50	②生徒集合点呼（天王寺） @びっくりドンキー天王寺店前
		08:00	バス2号車 天王寺発
		09:00	児童生徒集合（近鉄奈良）
		09:10	2号車近鉄奈良発
09:50	針江着		
10:00	フィールドワーク開始		
11:00	フィールドワーク終了		
11:20	バス①③号出発	11:10	針江着
11:30	昼食	11:30	フィールドワーク開始
		12:30	フィールドワーク終了
		12:50	昼食
13:00	バス①③号出発	14:00	バス②号出発
14:30	八幡堀着		
14:40	フィールドワーク開始		
15:30	フィールドワーク終了	15:30	八幡堀着
15:40	八幡堀①③号出発	15:40	フィールドワーク開始
16:20	青年の城着	16:30	フィールドワーク終了
16:30	部屋へ移動	16:40	八幡堀②号出発
17:00	入浴開始	17:20	青年の城着
17:30	入浴終了	17:30	部屋へ移動
		17:40	入浴開始
		18:20	入浴終了

バス内には手荷物（リュックなど）
中には、水筒、持参した昼食、タオル、帽子、メモ、筆記用具、貴重品、しおりなどをいれておく

入浴後、シーツ3種類（かけ布団用・しき布団用・枕カバー）を1階のシーツ置き場へ取りに行く
★部屋の人数分を代表者（数名）が取りに行く

18:20	夕食		
19:00	夕食終了	18:40	夕食
		19:30	夕食終了
19:40	ワークショップ開始 @体育館		
21:00	ワークショップ終了		
21:00	就寝準備		
22:00	就寝		

夕食会場に持ってくるもの
①水筒（新しいお茶をいれてもらいます）
②体育館シューズ
③手荷物　部屋には戻れません！

学びあい交流会 2日目 タイムスケジュール

06:30	起床・洗面
07:20	朝食
08:00	朝食終了
08:00~	部屋の片づけ・荷物をバスへのせる
08:30	ワークショップ開始
10:00	全体共有と振り返り開始
11:00	全体共有と振り返り終了
11:10	ラ・コリーナ予習開始
12:00	ラ・コリーナ予習終了
12:20 ~13:00	昼食

朝食に行くときに
シーツ3種類（かけ布団用・しき布団用・枕カバー）を分けて、1階のカートに返却してから、朝食会場

布団の片づけは指示通りに！
忘れ物がないように、全員でチェックをしてから部屋を出ましょう！ゴミはすべて持ち帰り！

«バス①号車・③号車（龍谷号）»		«バス②号車»	
13:20	バス①③号生徒集合点呼 青年の城出発	13:20	バス②号生徒集合点呼 青年の城出発
13:40	ラ・コリーナ着		
13:40	フィールドワーク開始		
14:20	フィールドワーク終了		
14:30	ラ・コリーナ出発	14:30	ラ・コリーナ出発
		16:35	奈良着 解散
17:00	梅田西着 解散	16:45	奈良発
17:10	梅田西発	17:40	天王寺着 解散
18:15	大沢中学校着 解散		

	8 月 20 日－21 日の様子
問題解決への多角的視点＝融合知／接続知	**学びあいは事前学習会だけでなく、往路のバス車中でも行われた。1 台のバスに異なる学校・異なる学年の児童生徒、そして先生方が混在して多様な参加者が共通の目的（見学ではなく自らの学びを問い、深化させる）と自らの役割を自覚したり、お互いに健康に気遣うことが可能な関係性を構築していったプロセスを紹介する。ここでの役割は事前研修に臨場・参与してきた大学生が担うこととなった。**
8 月 20 日 出発・バス内	**出発　バスでのレクリエーション活動の様子** （異なる学校、異なる学年の児童生徒を混在したバスでの多様性交流プログラム） **☆　バス 1 号車（西梅田発）** 一号車は、小中高全ての年齢の参加者が乗車しており、さらに神戸、大阪、滋賀すべてから集まっているという点でも非常にバラエティ豊かな同乗メンバーとなった。そのため、まずは参加者の緊張をほぐし、バス内の雰囲気を温かいものにすることから始まった。自己紹介ではプロフィール情報に加えて「宝くじが当たったら何に使うか？」というお題を設定して行った。その後はバスの座席でチームを組み、自分で国名を選んで作るビンゴを行った。（以下、他のバスでもレクリエーション内容は同様である。） 自己紹介のお題に対して、「豪華客船で世界一周や別荘を購入」、「貯金」などそれぞれの個性あふれる夢が飛び交い、非常に盛り上がった。また、先生を含め呼んでほしい名前を決めて名札を作り、その後のゲームではできるだけ名前を呼び合うようにした。この工夫のおかげで、お互いを認知することができ、それ以降の学びあいを楽しい雰囲気で行うことができるようにした。 1 号車は、滋賀に到着してから滋賀県立守山中学校高等学校の生徒が合流して同上した。途中乗車の高校生が疎外感を覚えないように、バス全員が拍手で迎え入れ、少しの時間ではあったが一人ひとりの個性が発揮できるような交流が行われた。バス内での交流があったことにより、その後の活動や帰りのバスの時点で一体感を持つことができたと感じている。 **☆　バス 2 号車（天王寺発）** 二号車は全てのバスの中で最も人数が多いバスだったため、補助席も全て埋まった状態で集合地点の近鉄奈良駅を出発した。2 号車のバスでは、まず横一列でチームになってもらい、自己紹介を行った。そのあと、半分ゲームとアレンジビンゴを行った。横一列が同じ学校とも限らず、様々な地域から集まった様々な学年の方がひとつのチームとしてゲームを行うことに最初は戸惑っている班もあったが、どのゲームもみんなで協力して盛り上げてくれてとても和やかなバス内レクリエーションを行うことができた。また、同乗していた先生方もレクリエーション活動にとても積極的に参加して盛り上げてくださり、すごくあたたかい気持ちになった。自分たちの想像以上の盛り上がりをみて、

この後の活動がすごく楽しみになった。同時にお互いを認知するだけにとどまらず、一人ひとりが 2 日間を充実したものにする当事者になることができたように思われる。

☆　バス 3 号車（西梅田発、神戸龍谷中学校高等学校号）

3 号車は神戸龍谷中学校高等学校の暖かいご配慮により、スクールバスをご提供いただき運行していただいた。このため 3 号車には神戸龍谷中学校高等学校の生徒が学校から乗車しており、最初から知り合いや友達同士の関係性が築かれていた。その上で二日間の目的をより深く達成させるためにバスレクを行った。車中では、自己紹介・ビンゴを中心に行った。自己紹介では名前や学年の他に「宝くじに当たったら何に使いたいか」を発表した。ビンゴは隣の席同士でペアを組み、先生方にも参加してもらった。それまでは隣同士や友達のグループ内で喋っていた生徒たちが、自己紹介やゲームが始まってからは、普段とは異なる内容や質を伴った友人との語らいや楽しさの共有が行われたようである。3 号車もバス全体が、2 日間の学びあいに向かうレディネス空間として盛り上がっていた。

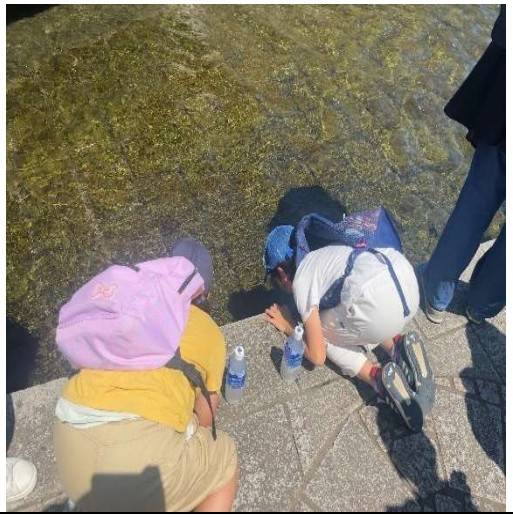
8 月 20 日
1 日目（午前）

1 日目（午前）

滋賀県高島市・針江生水の郷でのフィールドワーク

高島市・針江では、学校・学年混在の少人数グループに分かれて、針江地区で暮らす方々に案内をしていただきながら持続可能性の生活の知恵に溢れた町を回った。

町では、各民家にある川端（かばた）について説明していただき、実際に川端の水を触ったり飲んだりして身体で感じながら、比叡山系からの地下水の豊かさを学ぶことができた。また、川端には大きな鯉が住んでいて（飼っていて）、その鯉が川端を泳ぐことで清流を循環させていること仕組みを知ることができた。また、各家庭の方々も、下流でこの清流を利用する人（住民）のことを考えて水をきれいに保ちながら使っている様子を見ることができ、水を通じての住民同士の支え合いや、人と自然の共存を感じることができたフィールドワークとなった。



○	○

8 月 20 日
1 日目（午後）

活動と知と技術の「活用」（繋げる）行為が意味を形成する。

SDGs の形＝尊重

1 日目（午後）

近江八幡市・八幡堀でのフィールドワーク

＜未来のために堀を残すことを主張した住民のおかげで豊かな街が残った事例＞

近江八幡の八幡堀は、かつて（昭和 30 年代）「どぶ川」と呼ばれ、開発と共に埋め立て計画が立てられた。しかし、当時の市民が「埋めた瞬間ら後悔が始まる」を合言葉にして、清掃活動を行うようになり、やがて今日のように風情に溢れた堀と町の文化を取り戻した。参加者は、先人が未来（現在）に残そうとしたものは何だったのかを考えながら、午前と同じグループに分かれて周辺を見学した。児童生徒たちは川を走る舟や水路にたくさんの興味を示していた。普段の暮らしの中では味わうことの無い特有の街並みに心躍らせている様子が見受けられた。問いに対する何らかの「尊いもの」を感じるだけでなく、所々にある看板やしおりに載っている資料などを見て八幡堀の商業都市としての発展の様子を学んでいた。お土産屋にも立ち寄り家族へのお土産や自分が食べるためのお菓子などを買って楽しんでいた。まさにこの風景や町の発展、そしてこうして八幡掘りに来たくなるような街の営みが尊いものと考えられたのではないだろうか。

八幡堀

近江八幡のまちが発展した理由はいくつかありますが、八幡堀の役割は欠かすことはできません。堀は城を防御するために存在しますが、豊臣秀次はこの八幡堀を運河として利用することを考え、琵琶湖を往来する荷船をすべて八幡の町へ寄港させました。

また、八幡山城下はかつての安土と同じく、楽市楽座を取り入れたことから、商人の町として大いに活気を呈しました。

多くの商人が八幡の町から全国へと旅立ち、近江商人として活躍した原動力となった八幡堀も、昭和30年ごろになると時代は高度経済成長期に入り、人々の生活が変化する中で、次第に市民の関心も薄らいできました。やがて、八幡堀はドブ川のようになり、埋め立てられようとしました。

しかし、「八幡堀は埋めた瞬間から後悔が始まる」の合言葉により、市民が立ち上がり、清掃活動に取り組みました。その結果、次第にかつての姿を取り戻すようになり、今日でも各種団体による清掃活動が続けられています。

八幡堀は、写真や絵画の愛好家などが数多く訪れ、時代劇のロケ地としても頻繁に使用されるなど、市民や観光のシンボルとして位置づけられています。

▲ 昭和40年代後半（明治橋からの風景）
Hachiman Moat in the early 1970's (View from the Meiji Bridge)
昭和 40 年代前期（从明治桥上拍摄的风景）
1970 년대 초（메이지다리에서 바라본 풍경）

▲ 現在の八幡堀
Hachiman Moat today
现在的八幡堀
현재의 하치만보리 수로

Hachiman Moat

There are several factors that contributed to the development of Omihachiman. One major factor was the Hachiman Moat. Like most roads, this moat was originally built to protect a castle. Answerin, in the 1580's, Hideyoshi Toyotomi transformed Hachiman Moat into a canal system and forced boats using Lake Biwa to stop in Hachiman.

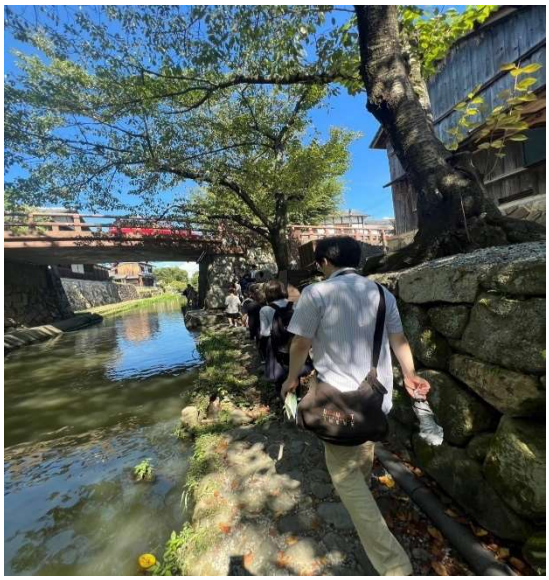
Also, while Hachiman Mountain Castle was in existence, free trade was initiated similar to the mantle town of Azuchi. This caused Hachiman to become an active trade center. Many merchants spread their business throughout Japan from Hachiman. Hachiman Moat thus served as a catalyst for Ohmi businesses. However, after the period of great economic growth back in the mid 1960's, people's interests began to change. Gradually, interest in Hachiman Moat faded. Finally, Hachiman Moat became a sewage canal and almost became a landfill.

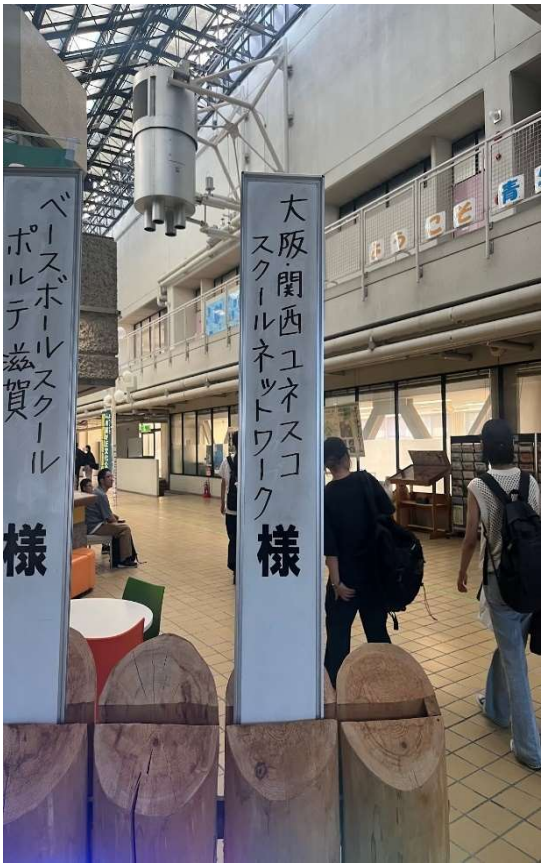
At that time, however, some citizens resisted this landfill and begin cleaning the moat under the slogan, "We will be sorry if Hachiman Moat becomes a landfill." As a result of such efforts, Hachiman Moat eventually returned to its former appearance. Various groups still continue the cleaning effort.

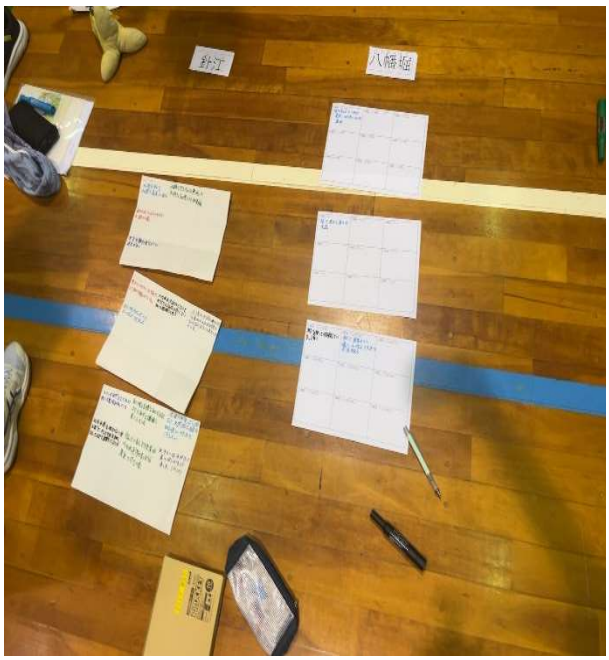
Today, many people who enjoy photography and painting visit Hachiman Moat, and it is often used as a shooting location for history dramas. Hachiman Moat remains a symbol of the Omihachiman citizens and a main tourist attraction.

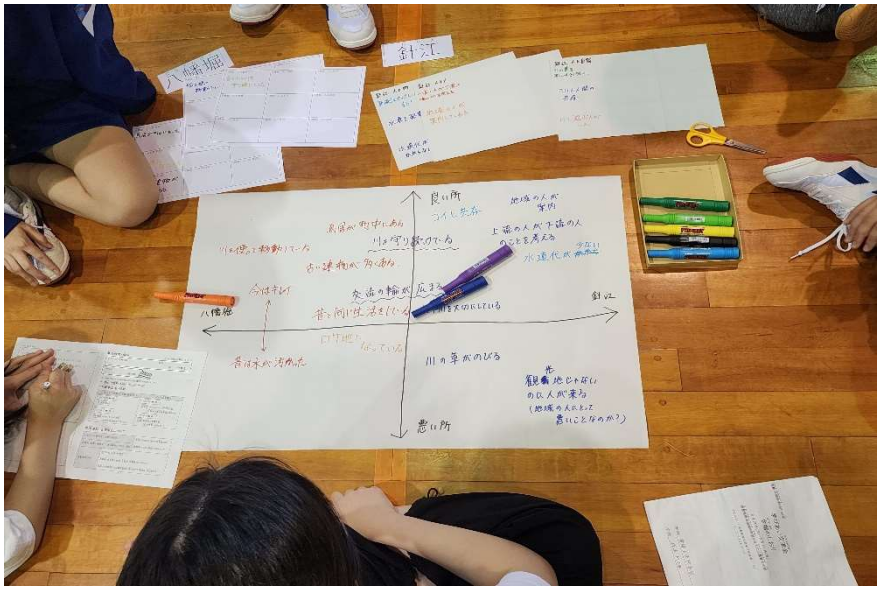
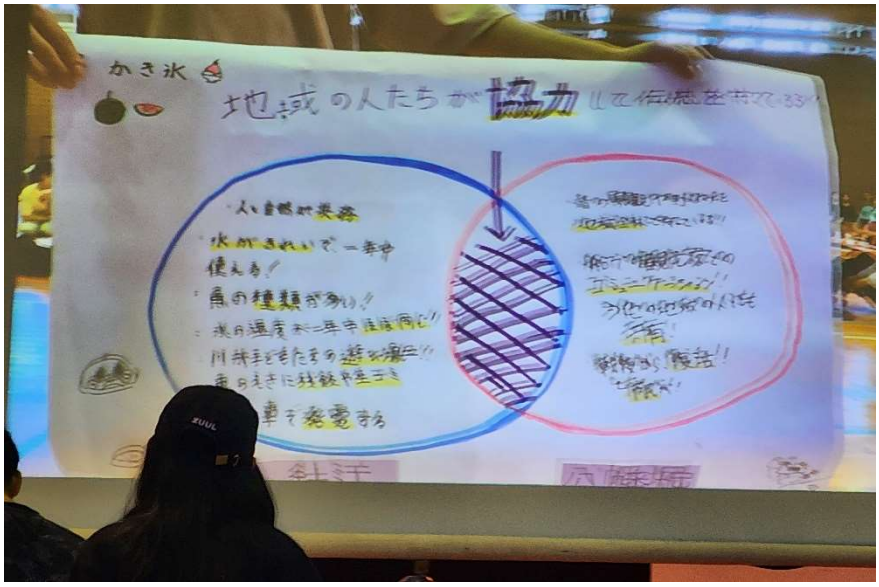
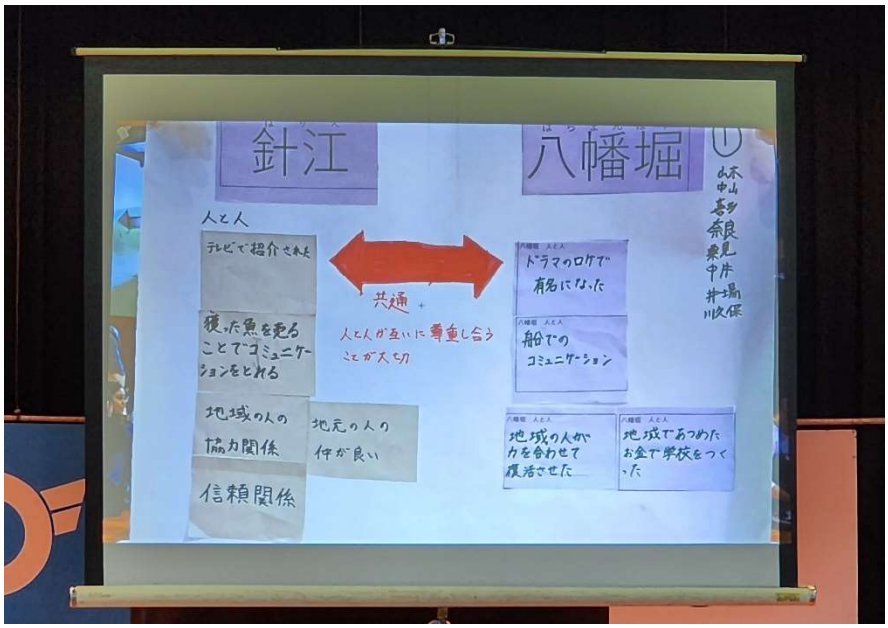
八幡堀（八幡护城河）

相河的起源

8 月 20 日 1 日目（夕）	 **1 日目（夕方）** **ワークショップ活動の様子** **＜これまでの学びを共有し、異なる視点や異なる考えに出会うワークショップ＞** 夜のワークショップでは、各グループで 1 日の学びを振り返った。日中の活動で訪問した針江と八幡堀のそれぞれについて、持続可能性の視点として**①全ての命や自然との関わり（人と自然）、②心が豊かになる、安心できるささえ合い（人と人）、③人がつくった暮らしやすい社会（人と町／社会）**という３つの観点から気づきや学んだことについてグループ内で意見交換、情報共有を行った。日中での学びを紙に書き出すという作業をおこなうことで、学びを記録し、整理することを意図した。これにより、日中の活動時間には気づかなかったこともグループメンバーと振り返るなかで新たに発見することとなった。

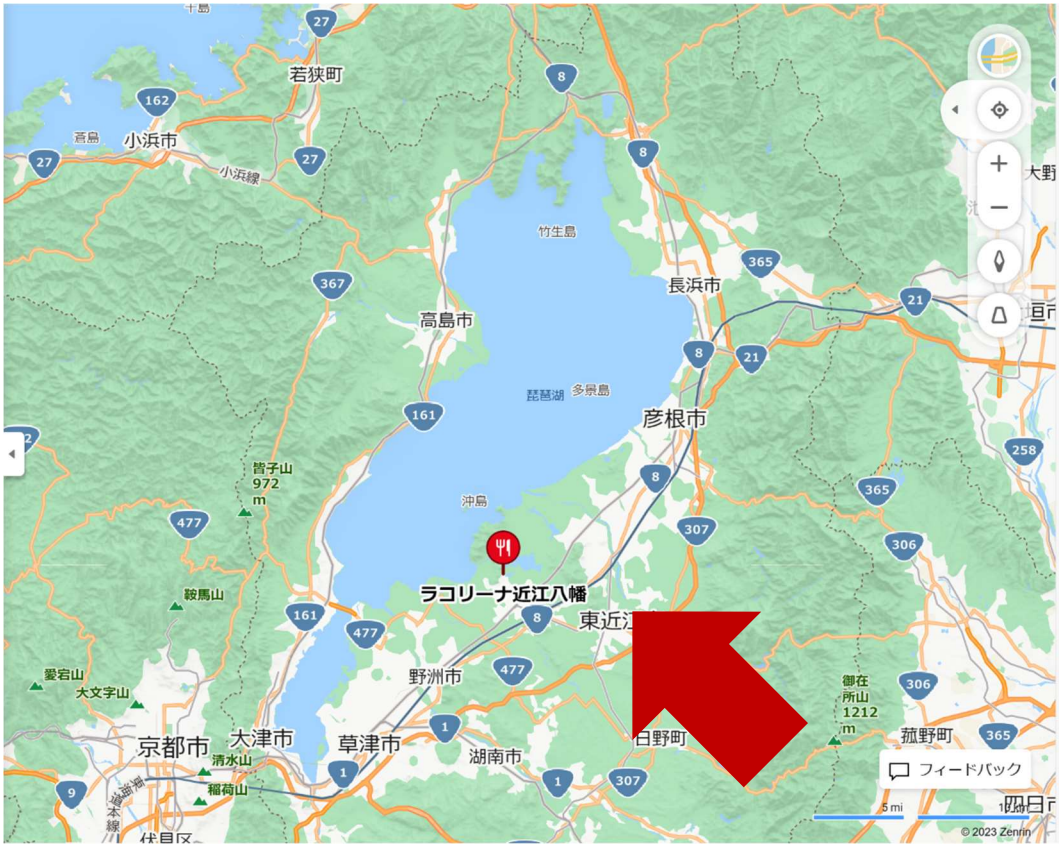
8 月 20 日 1 日目（夕） 身近な生活の中にあるユネスコや ESD を意識化する。	**ワークショップその２　ＥＳＤ劇団** ESD の概念をもっと身近な例を通じて考えてみるという目的で、大阪公立大学の学生が ESD の考えに基づいて持続可能性のある姿「良い例」とそうでない姿「悪い例」を 30 秒ほどの劇にして３つ披露した。1 つ例を紹介すると、反対側から歩いてきた人に「おはよう！」と挨拶をしたが、無視されてしまったというもの（これは悪い例。後に良い例として挨拶をしたとき、「おはよう！」と返してくれる例も披露した）。このとき、「無視された人はどのような思いを抱いたのか」、「挨拶し返してくれたらどのような思いになるだろうか」という問いについて参加者みんなで考えた。これらの問いについて、小学生は「自分がもし無視されたら悲しいと思う」と言ってくれた。これは、平和の砦を心の中に備える第一歩として位置づけられる。また、人と人との平和な関係の持続可能性の観点からも位置づけられる。挨拶を交換することでこのような些細な出来事でも ESD に繋がっていることを学び、今後の日常生活においても、今回学んだ ESD の概念を基に行動していこうと意見を交換した。
身近な生活にある ESD の発見！	**エピソード** **希望が丘文化公園青年の城での生活に見た ESD**  私（大学生）が特に印象的だったエピソードは、食事の際のことだ。一つ目は食器を返すときのことである。年下の子は食器を返却する際、年上の子に任せきることが無かった。自分で自分の食器の後始末はするという姿勢の現れに自立心を感じたし、年上の子はそのような年少の子を見守っていた。見放す訳でも、作業を全て請け負う訳でもないこの経験にユネスコ的「協働」の姿勢が表れていると感じた。もう一つが、私が白米を茶碗によそっていた時のことだ。多くの生徒が、「ありがとうございます」と声をかけてくれた。些細なことを見逃さず、当たり前としてではなく、感謝の気持ちを伝えられるところに、協働が実現する理由を見た気がする。 ここまで様々な活動を通じて、徐々に交流を深めてきた子どもたちだが、就寝のときも学年や学校（所属）問わずごちゃごち

	ゃになって一緒に時間を過ごす。このとき、互いに協力して時間を共にしている子どもたちの姿があった。1 部屋には 8 人ほどが入り一緒に時間を過ごしたが、高校生は各部屋のリーダー的な存在として、小学生や中学生も一緒に高校生の姿を見て「一緒にやろう」、「自分も手伝う」と何事に対しても積極的に参加する姿があった。この団結力に私は驚いた。一緒に活動してまだほんのわずかな時間しか経っていない。目の前にいる人が誰かもあまりわかっていない。そんな状況にも関わらず、互いに協力している姿や笑顔はじける姿にまさにお互いのリスペクトがあるからなのではないだろうか。 **2 日目（午前）** **全体共有と振り返り**
8 月 21 日 2 日目（午前） 生徒同士の学びと、そこから学ぶ教師の姿。	2 日目の朝には、1 日目の夜から始まったグループワークの続きを行い、グループごとに発表を行った。グループごとにそれぞれ色（視点の特徴）があり、個性溢れるまとめ作業となった。グループの中で針江チームと八幡堀チームと二手に分かれ、途中でチームを入れ替えて作業を行っているグループがあったり、全員でそれぞれが別のチームで経験した事柄を共有しながら進めているグループもあった。途中、他のグループの状況を見て回る時間が設けられたのだが、その際にそれぞれが体験した内容を改めて思い出していたり、他のグループのまとめ方から自分の新しいまとめ方を生み出していたりした。発表では、ベン図を使ってまとめているグループや、良い点悪い点を整理しているグループ、自分たちの町との違いを一緒にまとめているグループ、「再生」をテーマにまとめているグループなどがあった。まとめる際の主な指標は示されていたが、そこからグループそれぞれが自分たちなりに考察し、それぞれのオリジナリティ溢れるまとめへと進化していた。針江や八幡堀で現状を保つために行っていることをまとめていて、ESD の観点を意識しながら話し合った結果がよく表れていた。 

自分たちの理解、自分たちの納得、そして、自分の最高点にタッチした実感。	  

8 月 21 日 2 日目（午後） 企業の ESD/SDGs への取り組みから学ぶ。	**2 日目　近江八幡市・ラ・コリーナでのフィールドワーク** **＜環境と人との関係や、ライフスタイルの転換を先導している企業見学＞** ラ・コリーナについては、8 月 21 日の午前の時間に予習を行った。そこでは企業であるラ･コリーナがどのような理念をもってどのようなことを行っているのかを学んだり、ESD の考え方との共通点などを学習したりした。ラ・コリーナの理念は、「自然に学ぶ」で、「ラ・コリーナ近江八幡宣言」も出されている。ここには風や土、太陽や水の豊かさを感じる土地で、自然と人の営みを、受け継がれてきた智慧や技を次の、さらに次の世代へつなげていくためにラ･コリーナ近江八幡から世界に向け提案したいという思いが込められている。ラ・コリーナでは、木を植えたり小川を作ったりして、生物が元気にいきづく田畑を耕しており、建物の壁などもすべて手作業で塗り上げている。実際に足を運んでみると、とても自然豊かな土地であり、八幡山と一体化した世界のようだった。お菓子を通じて自然の中で過ごす経験を得られる空間が創り出されていると感じた。建物へと繋がる通り道で上を見上げると屋根がコンクリートではなく自然の素材で作られていて、ふとしたところからも自然を感じられた。生徒たちはラ・コリーナで、朝の学習で学んだ建物を実際に見たり、手作業で作り上げられた壁に触れたり、景色に感動したり、お菓子を楽しんだり、と各々自由に行動した。

SDGs に取り組みながら利益を確保することも「SD」	
社会ビジョン･未来ビジョンを共有	



ラ・コリーナで取り組まれていることは、一日目に針江と八幡堀についてのまとめを行った際に ESD の基本的な考え方と結び付けた「人と人」、「人と自然」、「人と町／社会」の持続可能な関わり方だといえる。ただ単にお菓子を楽しみに訪れるのではなく、それに加えて、ラ・コリーナで行われていることの背景について説明を受けてから ESD の目線をもってこの場所を訪れることで、「経験」として ESD の概念を自分の中に落とし込めたのではないだろうか。

（2） 9 月 2 日　事後学習

9 月 2 日
全体振り返りの会

9 月 2 日(土)にスタディーツアー合宿のまとめとして「事後学習」が開催された。グループ活動を行った班が再び集まり、スタディーツアー合宿での学びの振り返りを行い合宿での学びの成果を多様な方法で広く伝える活動を行った。具体的に、学びや印象に残ったことを「川柳・俳句」、「絵日記」、「漫才」、「ESD 劇」、そして「共同宣言文」のいずれかの形でアウトプットして学びを広げることとした。（作品の一部はホームページに掲載しています。）

この手法について、多くの発表会では PPT を用いてプレゼンが行われる形式が採られる。しかし、大阪関西ユネスコスクールネットワークでは、数年前からこの方法に加えて（即興の）ESD 劇団を結成したり、俳人になりきってもらったり、政治家の気分で

宣言を作成してもらう手法で学びの成果を表現することをしている。とりわけ宣言文は本質を見逃さない点において重要なまとめとなった。また、漫才や ESD 劇の手法は、学びの本質の浸透にとってとても有効であった。このようにスタディーツアー合宿で学んだことの最終整理をしたことで合宿自体の意義を感じられ、学校が違う生徒同士で久しぶりと声を掛け合っている様子も見られた。交流を通して新たな絆が生まれた。

学びあいス合宿を通して
（今次の企画に参与・臨場した大学生からの声）

今回のスタディーツアー合宿を通して、私が理想とする学びの形を実際に体験することができたように感じた。なによりも様々な学年、地域の生徒が「能力の一部分」でしかない能力の一部分でしかない偏差値などのバックグラウンドにとらわれることなく、ともに学びあえる環境であったことが私の目にはすごく新しく映った。自分の経験をもとにしたアクティブラーニングでは、知識を詰め込むだけの教科学習以上に参加した生徒さんたちの積極的な姿勢を見ることができた。全員が同時に「経験」したことをもとに、それぞれの視点から同じ物事について議論することで、相手の意見に耳を傾けたり、自分事としてより真剣に向き合ったりすることが可能になることを知った。私はバックグラウンドに関係なく、全員が自分事としてとらえ、能動的に取り組める学びを教科学習において実現したいと考えているので、すごく大きなヒントを得られたような気がした。貴重な学びの機会を作ってくださった運営の先生方、参加していた生徒さんたちに心から感謝したい。（男子学生）

私は合宿を通して、他者の意見に耳を傾けられる姿勢を生で感じることができた。その中でも特に、先生方の姿勢に感動した。教育現場で実践されている生徒のユネスコ的態度については、ASPnet 校の学習会で見させてもらっていた通り、年齢に関わらず、他者の意見にしっかり耳を傾け、「協働」が為されているのを実感した。しかし今回特に新鮮だったのは、先生方の真剣なまなざしと、細かな連携力、周りを見渡す力、生徒そして大学生にも対等な物腰で向き合っていた姿だった。合宿のなかに大人と子どもの上下関係など一切なく、それこそ先生方が発揮されている聴く力・対等・協働があるからこそであると感じた。（女子学生）

私自身は約 3 年前のコロナ渦真っ只中の時期から、大阪・関西ユネスコネットワーク（ASPnet）の学びあいイベントに参加し始めた。私にとって、今回ははじめて、参加者たちが 1 泊 2 日の「スタディーツアー合宿」を通して、生活を共にしながら学びあう機会となった。

今回、滋賀県での学びあ合宿を通して、より多くの時間を共に過ごすにつれて参加者同士の仲が深まっていく様子や生活のあらゆる場面でお互いを気遣い助け合う様子が垣間見られた。これまでの活動では、コロナ禍の影響もあり、1 日で完結するイベントが続いていたが、スタディーツアー合宿を経験することで、チームとしての仲間意識を持って活動に参加する小学生や、下級生の体調を気遣いながらチーム全体を先導する中学生や高校生の姿が印象的だった。ASPnet での活動において特徴的なことは、小学生・中学生・高校生・大学生・学校教員・大学教員・社会人など立場の異なる者が共に学びあい、対等にお互いを尊重しながらすべての活動を共に行う点であると考える。今回の合宿においても、滋賀県の針江地区や八幡堀を訪れたが、訪問先では地域の大人の方がボランティアとして私たちを案内してくださったり、またフィールドワークにおいては、学校の先生方がその地域の歴史や知識をより詳しく教示してくださったりした。合宿後の学びをまとめる時間では、針江地区の人々の生活の背景を深く想像する小中高校生の姿があり、その想像力の深さに私たち大学生や大人の方々もはっとさせられることもあり、小中高校生の発言から新たな気づきが生まれる瞬間があった。ASPnet の活動では、たとえ年齢・学年・立場などが異なったとしても、これらが異なるからこそ、様々な側面から多様な考え方が生まれ、新たな気づきと学びになるということを改めて認識することができた。（女子学生）

（3）フォローアップ

９月２日に行われた「全体振り返り」を経て、各参加児童生徒はこの学びの成果をどのように友達、クラス、学校へ広げていくかについて考えた。ある学校（奈良県立国際中学高等学校の中学生）では、下記のように学年報告会を開催して、参加者だけでなく学年全体で共有することが行われた。同校のご厚意により掲載しています。（この様子はホームページで簡単に紹介している）

合宿２日目の説明

1. 私達の班は学び合い交流会ユネスコスクール合宿２日目について話します!
2. 一日目の夜に、実際に針江、八幡堀に行って感じたことや思ったことを班のメンバーに共有し、「人と人」「人と町」「人と自然」を中心に繋がりを意識しプリントにまとめました。一番最初に、先生に学んだことを発表してと言われたときには誰も手を挙げず思い浮かばなかったけれど、班で共有するとたくさんの意見がでてきて、グループ活動の大切さを実感しました。
3. その次の日の朝、前日、まとめていたものを参考に針江と八幡堀の良い点や私達が見習うべき点をポスターにしました。
   例えば、針江の上流で暮らしている人は有害なものを流さないようにし下流の人たちと信頼しあって生活しているということや、八幡堀では昔からの伝統的な堀を守ろうとした人達がいたことなどを絵や図を使ってまとめました。
   初めましての人たちとポスターを作ったけど、小学生から高校生までの様々な年齢の人がいて、普段ではできない経験をすることができました。
4. １日目の夜に情報をまとめた紙を参考にファミリーでポスターを作成し、皆の前で発表をしました。その中でよく書かれていたのが、針江と八幡堀の良いところ、悪いところや、自分の住んでいる街と比べて違う所、思ったことです。
5. ここで何をテーマにポスターを作成したのかを一人ずつ発表します。
   私の班は再生をテーマにまとめました。八幡堀は堀を再生し、川の清掃を行いその堀を未来に残す活動を行っていることをまとめました。その際にガイドさんが手動ボートに乗って観光客などに八幡堀の周辺を案内しながら魅力や昔の出来事を伝えていました。
   次は針江です。針江は上流の人と下流の人がかたい信頼関係に結ばれていました。また川が綺麗だからこそ湧き水をこれからもずっと活用することができます。
   私はこのユネスコの合宿に行って学ぶことの大切さを実感しました。合宿に参加しなかったら毎日のようにお世話になっている針江の水のこともしれなかったし努力に触れることもできなかったので学んでみようとする姿勢はやっぱり大事なんだなとおもいました。
6. 私達の班は針江と八幡堀に住んでいる方々がどのようにして今のきれいな川や堀の現状を維持しているのかをテーマにしてポスターにまとめました。
   私はこの学び合い交流会のように
7. 私達の班は針江、八幡堀が協力して地域の環境を保っていることに着目し、つながりをテーマに、針江と八幡堀の環境、人々、暮らしをつなげてポスターにまとめました。
   私はこの活動を通して、改めて環境の大切さを実感しました。
   針江の川の綺麗さや八幡堀の街作りを見て環境のために動き守っていくことが大切だと思いました。
8. 私達の班は針江と八幡堀の良い点と悪い点を私達の街と比べることをテーマにポスターをまとめました。私はこの活動を通して人々が協力する良さを学びました。

9. 皆さんこれは何だと思いますか正解は会社です。ここはラ・コリーナという製菓企業の本社です。この企業は※「自然を愛し、自然に学び、人々が集う憩いの場」ということを念頭に置き会社を運営しています。具体的には会社の敷地内で社員さんがお米を栽培していたり、会社の裏山に植林したりしています。これらの行動は自然に生かさせてもらっているというこの企業の考え方に基づいた、他の企業も見習うべき素晴らしい習慣、行動だと思いました。
10. この絵を見てください。この A のところは土塔（どとう）といってこのラ・コリーナの人気フォトスポットとなっています。遊び心あふれるデザインがとても素敵でした。B は丘の斜面に作った棚田です。棚田は傾斜地にある稲作地のことでここでおいしいお米を作っています。季節によって異なる美しさを見せてくれるのがポイントです。C は今年の１月にオープンしたばかりのお店です。ラ・コリーナで有名なバームクーヘンの販売はもちろん、焼きたてのバームクーヘンを味わえるカフェも併設（へいせつ）していました。最後は D です。ここは本社で一般の方は入れないんですけどとてもデザインが可愛くて見ているだけでもテンションが上りました。
11. これで合宿二日目の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

３．成　果

事前事後学習、１泊２日の琵琶湖周辺スタディーツアー（スタディーツアー合宿）の成果は計り知れない。

（ 教員による運営面 ）

異なる学校の教員が協働して合同の学びを創る ESD 的教育連携（異校種連携）の考え方とノウハウの再生が行われた。これは事前学習のプログラムを分け持つだけでなく、実際の運営においても全員が何らかの役割を担うことで成功に至るノウハウを共有した。これこそが ASPnet（ユネスコスクールネットワーク）の本質だと言える。

その業態は、下見、参加者名簿、しおり作成、学校混在の部屋割り、旅行社連絡対応、学校混在のバス乗車位置での集合（天王寺発・大阪梅田発）、資料作成、アレルギー対応生徒一覧作成、集金会計、安全対策（道路横断の際の担当・移動中の誘導体制・給水体制ほか）、養護教諭待機、危機管理・緊急時対応確認、食事指揮、ワークショップリーダー、宿泊施設との連絡対応、随伴車による荷物運搬・・・他。

（ 児童生徒の学び ）

① 人と人、人と自然、人と社会との関係において、持続可能性を深めたり生みだしたりするために必要な大切にすべき「尊いもの」とは何か、を各自が探し出すことができた。

知識として学び、その実行・実践を身近なところから始めることはとても重要であり、このことはよく各学校から報告される。しかし、ある一定の結論を予定した ESD や SDGS ではなく、より深く考え、問題解決につながるための思考様式と価値を会得することで新たに直面するであろう問題に挑むことになる。今次はこれらを得ることにつながったと言える。

② ESD／SDGs をテーマにした多様な実践と学びを交換して、異なる地域や世代を超えて、多様な視点で学びあうことで連携と連帯が生まれることを体感した。同時に、単一視点の ESD／SDGs ではなく、異なる多様な ESD／SDGs の課題や達成アプローチを共有することができた。

よく、高校生が小学生から学ぶものがあるのか、あるいは進学実績の似たような学校同士で連携する、などをよく耳にする。しかし、排除や優越的地位視点の志向は持続可能性を損なうことにつながってしまうこととして既知のことである。大阪関西ユネスコスクールネットワークでは、異なる立場、異なる経験、異なる視点、異なる背景・文化の人たちがいるからこそ、同じものを観ても見え方が異なるということを多様性の学びの資源として「学びあい」を行っている。これは、ASPnet の基本的な考え方でもある「共に生きることを学ぶ」（学習の４本柱）とも相まって実直に実践を行っているところである。

（ 異なる団体との連携 ）

今次の学びをデザインするにあたり、滋賀県庁、高島市針江地区自治会、近江八幡市商店街、株式会社たねや「ラ・コリーナ近江八幡」、株式会社名鉄観光大阪教育旅行支店の皆様の多大なるご協力をいただいた。各団体の持続可能性への想いが未来を担う児童生徒の学びにつながることが、教員間において共有された。この「学び」をつくる連携が構築された。２０２４年５月、このステークホルダー連携をそのまま用いて、宿泊研修を行った学校が生まれた。

以上の報告は 2023 年 1 月以降、ホームページ「大阪・関西ユネスコスクールネットワーク」にて公開している。https://asp-net-osaka.jp/index.html